

# 招聘研究員

氏名	朱子昊 (ZHU Zihao)
所属機関等	浙江工商大学 東亜研究院
受入期間	2018年1月15日～2018年1月29日
指導教員	小熊 誠 (チューター：華雪梅)
研究課題	筆談の中の非文字資料の研究



## 朱舜水の研究概述

朱子昊

朱舜水は、近代中日交流史の中で非常に重要な人物である。朱舜水は中国の明朝末から清朝初めの時代に活躍し、清朝の転覆と明朝の再興のために努力し続けた。1659年、60歳の高齢になった朱舜水は熟慮の末、国内の反清勢力の力で国を再興することが既に不可能であると判断し、日本に渡来した。亡くなるまで20余年、日本で暮らした。

明末清初という時代に、朱舜水のように満州族による清朝統治に抵抗する人は多くいた。例えば、交趾や朝鮮などの遠い他国に行く人もまた多かった。また、その中に能力が朱舜水に劣らない人もいた。それでは、なぜ朱舜水を研究するのか、朱舜水の特性は何であるかということ述べる。

朱舜水は二つの特徴を持ち、これは同時代の人物には備わっていない特徴であり、かなりの研究価値があると思われる。

まず、中国の歴史書には朱舜水に関する記録はほぼ見当たらないということである。その代わり、日本では極めて高い名声を得ている。このようなことは、中国人にとって、非常に珍しいことである。朱舜水が中国にいた頃に残した資料は極めて少なく、彼の書いた文章もほとんど残っていない。また、中国には朱舜水に関する歴史記録もなかった。しかしながら、日本では多くの資料が残されているだけでなく、朱舜水の死後、日本にいる門生と友人らは次々と彼の伝記をまとめ、朱舜水の一言半句を収集し、各種版本の『朱舜水集』を世に残した。現在判明している「朱舜水全集」は以下の通りである。

①『明朱徵君集』10巻、「加賀本」ともいわれ、加賀藩の儒臣源(五十川)剛伯(?-1699)により1684年に編纂された、現存する最初の舜水遺文である。源剛伯は朱舜水の門生である。朱舜水が亡くなった後に、源は自分と朱舜水との問答や書簡などを本にまとめたが、出版には至らなかった。現在、朱舜水に関する研究では、この文集の内容を言及することは極めてまれである。

②『舜水先生文集』28巻、「水戸本」と呼ばれ、水戸藩二代目の藩主であり、朱舜水に弟子の礼を執る徳川光圀によって編纂され、その子の徳川綱條によって、1715年に補完された書である。当該文集の手本は現在、東京の早稲田大学図書館に所蔵され、神奈川大学が所蔵する書もこの文集の刻本である。

③『舜水先生文集』28巻、通称「享保本」で、茨城多左衛門によって1720年(享保5年)に編集されたものである。

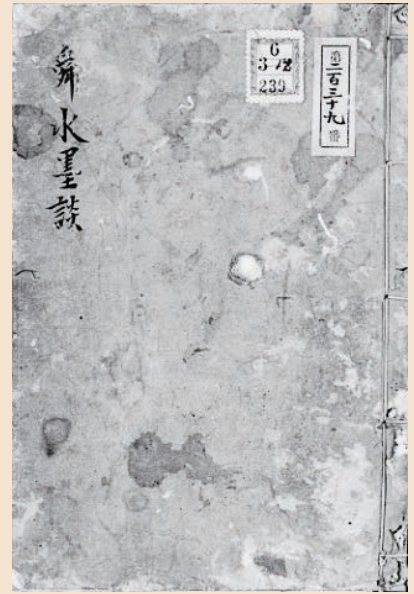
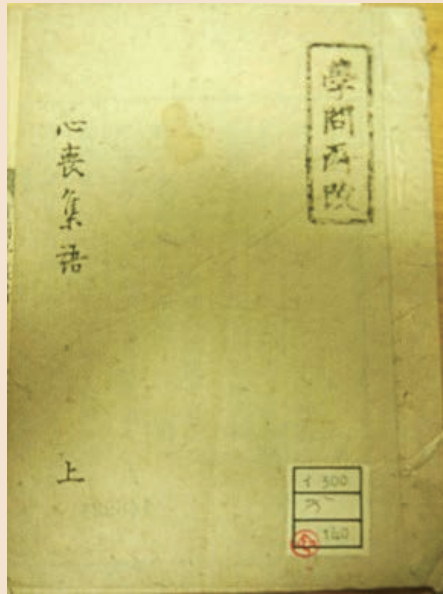
④『心喪集語』は、朱舜水の門生である安東省庵によって編纂され、朱舜水と安東省庵の手紙、筆談交流内容を収めたものである。

⑤『舜水墨談』は、朱舜水の友人である人見竹洞により編纂され、朱舜水と人見竹洞との11回にわたる筆談内容を記録したものである。

⑥『舜水問答』は、人見竹洞によって編纂され、『舜水墨談』と類似しており、朱舜水の筆談内容を記録したものであるが、その内容が『舜水墨談』より詳細である。

⑦『西遊手録』は、徳川光圀の部下である小宅処齋によって編纂された書である。これは、小宅処齋が徳川光圀の命により、長崎で朱舜水と会ったときの筆談内容を





左から『舜水先生文集』、『心喪集語』、『舜水墨談』

記録したものである。

⑧『朱氏舜水談綺』は、朱舜水の門生である安積澹泊によって編纂された書である。当該書には、朱舜水の描いた図面が数多く収められていた。例えば、深衣、野服、棺槨、宮殿と楼閣などが収録されている。

前述の8種の文献は、当時朱舜水の門生と友人により編纂された「朱舜水文集」である。後世になってもこれらの文集は度々校勘・改訂された。主なものは：

①『朱舜水全集』28巻、通称「稲葉本」。日本の学者である稲葉君山が編纂し、1912年に出版した。この文集は「水戸本」と「加賀本」の内容を完全に収録したものである。

②『舜水遺書』25巻、通称「馬浮本」。中国の儒学者である馬浮により、1913年に「稲葉本」を底本として完成された。

③『朱舜水全集』。台北世界書局によって「馬浮本」をもとに印刷され、1962年に出版された。

④『舜水遺書』29巻。台北古亭書屋によって「馬浮本」をもとに印刷され、1969年に出版された。

⑤『朱舜水集』2冊。朱謙之によって整理され、1981年に中華書局によって出版された。朱謙之は「稲葉本」をもとに校勘し、各版を参照して増補と改訂をした、現在最も広範に使われている版本である。

⑥『朱舜水全集』。北京中國書店が「馬浮本」をもとに印刷し、1991年に出版したものである。

⑦『新訂朱舜水集補遺』は、台湾の学者の徐興慶が『朱舜水集』（朱謙之編）をもとに増補し、『朱舜水集』に未収録の舜水遺文を多く収録した。その増補の内容は、多くが朱舜水の門生と友人が収蔵していたものであ

り、それまで未刊行のものであった。

資料の出典は主に東京大学史料編纂所の『耆舊得聞』・国立公文書館の内閣文庫・国立国会図書館の人見文庫・佐賀県鹿島市の祐徳稲荷神社の中川文庫などである。

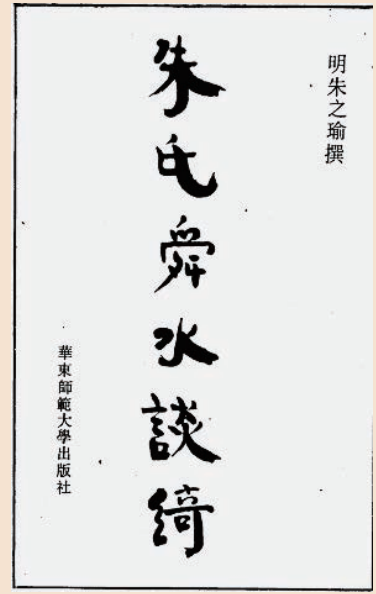
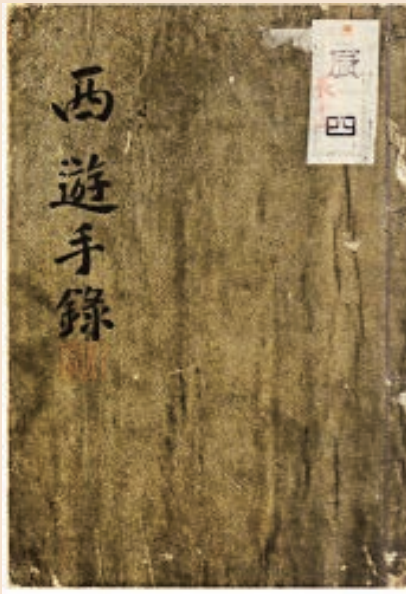
中国の学者の梁啓超は「南明には二人の大家があり、当時地元では、少しの名声もなく、しかし何百年後、あるいは外国で、大きな影響力を持った。その一人は王船山といい、もう一人は朱舜水という」といったことがある。それでは中国において名声がないにもかかわらず、なぜ日本でそのような礼遇を得たのであろうか。

これは朱舜水を研究するもう一つの理由でもある。朱舜水は日本に在る間、中日交流に非常に大きな貢献をしたからである。

朱舜水は最初長崎に居住し、講義をして生計を立てた。その後1664年、二代目の水戸藩主の徳川光圀が儒臣の小宅処齋を長崎に派遣し、朱舜水を訪ねて、江戸に来て講義するよう誘った。その後徳川光圀は、朱舜水に対して弟子の礼を執り続けた。朱舜水は当時の中国の礼制、儒学、政治、芸術などの面でかなり深い造詣を持っていた。日本の彼の弟子の多くは有名な学者になった。例えば『大日本史』を編修する彰考館総裁の安積澹泊、伊藤仁齋の長男である伊藤東涯に、「関西巨儒」と呼ばれている安東省庵などである。

当時の日本は外国人の監視に極めて厳しかった。普通の外国人が長崎に住むのは大変なことである。そのような時代にもかかわらず、朱舜水は江戸に招聘された。それには、主に以下の二点の理由があると考えられる。





左から『舜水問答』、『西遊手録』、『朱氏舜水談綺』

(1) 朱舜水の学問は見識が広く奥深い

朱舜水は日本滞在中、ずっと筆談を使って交流を行っていた。筆談という交流手段は、どこが特殊なのかというと、その場で答えを出さなくてはならず、参考書で調べているわけにはいかない、また、考えを詳しく練ることもできないという点にある。つまり筆談者の学問の広さや深さ、かつ的確さには高い水準が求められたのである。そのため、筆談者が主観的概念の問題を詳しく述べる必要に面した時には、往々にして簡単な回答、あるいは曖昧な供述でやり過ごす傾向があった。例えば、清朝の医者である胡兆新が日本の医官に対して答える中で、次のような内容が随所に見られる。

問 千賀道栄

明史嘉靖二十年，宮婢楊金英等謀逆，以帛縊帝，氣已絕，大医院使許紳急調峻劑下之，辰時下藥，未時忽作声，去紫血數升，遂能言，又數劑而愈。後閱焦竑《獻徵錄》，所用桃人、紅花、大黃諸下血藥也。峻劑果能有起縊死否？

復 胡兆新

縊死之人，虽有急救之法，方書上未見有峻劑醫治者，此或隨機應變之道。

問

舌疳、牙疔、牙癰、走馬牙疳、重舌瘡包之諸症，本邦之医士為難治。僕通家有口科，托僕乞先生之高論，倘或有治方，毋吝。

復 胡兆新

此等病自然難治之症，大抵火毒為多，亦無一定之方。

問

凡病新瘥後，以食物調治之法有之耶？

復 兆新

病後調攝，不過澹泊寧靜四字<sup>2</sup>。

以上の三問の答えは、胡兆新が日本の医官の医学的難問に面した際の回答である。彼の回答は「或隨機應變之道」、「亦無一定之方」、「不過澹泊寧靜」などの語句によってごまかし、自身の意見をあまり多く述べていない。また、自身の学識を展開することもほとんどないのである。

胡兆新といえば当時の長崎では極めて名声の高かった医者である。『胡氏方案』の奥書によると、胡兆新は当時、友人の程赤城の家に寄寓して、聖福寺、宗福寺で診療を行った。患者の数は数え切れないほど多く、効いた例は枚挙にいとまがなく、その名が江戸まで聞こえていた。また、彼の治療方法が報告される際には、しばしば幕府にまで進呈されたため、清国医師の医療技術はすこぶる奇特だと思われていた。それゆえ、江戸幕府の医官は胡兆新に学ぶために長崎へ派遣された。

しかし一方、朱舜水はためらわずに多くを語り、常々一般的な問題に対しても明確に答えるのであった。次に二つの例を挙げる。

問：今指為本根者如何？

答：君臣、父子、夫婦、昆弟、朋友，天地間之定位也。士、農、工、商，“國之石民也”。男耕而食，女織而衣，民生之常經也。所謂本根者，如斯而已。而又“壯者以暇日修其孝弟忠信”，國何患不治？何患不富？何事於浮文末節哉？以末節而圖治，是猶理絲而棼之也，吾未見



其能治者矣<sup>3</sup>!

この質問の中の“本根”には非常に多くの意味が含まれる。根本、基盤ともとれるし、本源、最初をも指す。それにもかかわらずここでの“本根”が一体何者の基盤、何者の本源を指すのかが、この質問の中では明確にされておらず、非常に曖昧な質問である。しかし朱舜水はこの質問の答えに治国治民の基盤を挙げている。これは朱舜水の「致知力行」(じちりっこう)、つまり、中原を匡扶(きょうふ)する思想の最も根本的な表現なのである。

また、野節への回答の中には次のものがある。

問：鄒漪亦文章之徒乎？

答：大明之黨有二：一爲道學諸先生，而文章之士之黠者附之，其實蹈兩船，占望風色，而爲進身之地耳。一爲科目諸公，本無實學，一旦登第，厭忌羣公，高談性命。一居當路，遂多方排斥道學，而文章之士亦附之。僕平日曰：明朝之失，非韃虜能取之也，諸進士驅之也。進士之能拳天下而傾之者，八股害之也<sup>4</sup>。

野節が尋ねたのは鄒漪の人柄であるが、朱舜水の回答は、“大明之黨(党)”というものである。朝廷と人民を禍に遭わせ、明朝の国家において人心が君主から離れてバラバラになっている根本原因に関する彼の考えをまとめている。ここで筆者は、朱舜水の観点が正しいかどうかを討議するつもりはない。だが、明確にすべきことは、朱舜水は生き生きと筆を走らせる間にも、朝廷が人心を失った原因を導き出し、的確に分析していたことだ。これは偶然の所産ではなく、細かな観察と深い分析によるものと見てとれる。

以上をまとめると、朱舜水の答えは、単にこの質問に対する回答というだけでなく、自分の思想や修学に関する

主張を自分の回答の中に含めている。それは大変鮮明な主観の色彩を帯びている。朱舜水の筆談の問答は、学問上の論争だけでなく、お互いに磨き合い、学問の方法や人の在り方を展開するものであった。朱舜水の筆談内容には、このように朱舜水自身の主張や抱負を包み隠さず展開しているものが多く見られる。

(2) 朱舜水が学んだ知識は当時の日本で必要とされていたものだった

当時の東アジアは激動の中であって、清朝が明朝に取って代わり、中原の覇者になり、我々漢民族が遅れをとってしまった時代であった。中華大地だけでなく、中華文化にも大きな災難が降りかかった。当時戦災を免れた日本は、隋唐時代から中華文化を手本としていたため、自然な流れで中華文化を継承することを望んだ。さらに、中華文化を最も直接的かつ速く継承し、華夷(中国と外国、開けた国と遅れた国)を判別する方法は、「礼制」の継承であった。朱舜水はまさに日本に必要な礼学の大家であった。朱舜水の視点から分析すると、日本に長く住んでいたことから、既に地理的に中原の回復を諦め、その代わりに中華文化が別の形で他の土地で継承されることを願っていたと考えられる。このことによって、まさに朱舜水は同時代の他の人物には備わっていない特殊性を持っていたといえるのである。

#### 【注】

- 1) 底本が不明瞭で、「紘」と書く。『清客筆語』によると、「竝」と書く。
- 2) 『東京大学総合図書館古医学書目録』東京：1978 v十・一三六・東京大学総合図書館編、財団法人日本古医学資料センター、p.3。
- 3) 『答野節問三十一條』、『舜水先生文集』卷十一。
- 4) 『答野節問三十一條』、『舜水先生文集』卷十一。

## 朱舜水研究概述

浙江工商大學 朱 子昊

朱舜水是近代中日交流史中是一個非常重要的人物。朱舜水活跃在明末清初的年代，一直为推翻清朝，恢复明朝而努力。1659年，年屆60的朱舜水眼見依靠國內反清的力量復國已經無望，便來到日本，并在此長居20餘年，直至去世。

在明末清初这个时代里，像朱舜水一样抵抗满清的人有

很多，远赴他国，譬如交趾、朝鲜等国的人也有很多，其中也有学问不下于朱舜水的人。那么为什么要研究朱舜水，他有什么特殊性？

我认为朱舜水有两个特点，是同时代的人所不具有的，存在极高的研究价值。

首先，朱舜水的第一个特殊之处在于，在中国的历史



上，几乎没有关于他的记录存在；而在日本，他却拥有极高的声誉，作为一个中国人，这是很罕见的。关于朱舜水在中国时期的资料非常罕见，几乎没有他的文字留下来，也没有相关的历史记载。而在日本，却有大量的资料留下来，在朱舜水死后，他的日本学生、友人们纷纷为他做传，收集他的只言片语，留下了各种版本的《朱舜水集》。目前已知的，在当时留下来的朱舜水全集就有：

1、《明朱徵君集》十卷，通稱“加賀本”，為日本加賀藩儒臣源（五十川）剛伯（?-1699）於1684年編撰，是現存已知最早的一部舜水遺文。源剛伯是朱舜水的近身弟子，在朱舜水過世後，他將自己與朱舜水的問答、書簡整理成冊，但並未付梓。目前關於朱舜水的研究中甚少提到這部文集的內容。

2、《舜水先生文集》二十八卷，通稱“水戶本”，為日本水戶藩第二代藩主，同時也是對朱舜水執弟子禮的德川光圀編輯，並由其子德川綱條於1715年校刻完成。本書的手校本目前藏於日本東京早稻田大學圖書館。神奈川大學所藏的也是這本文集的刻本。

3、《舜水先生文集》二十八卷，通稱“享保本”，由茨城多左衛門於1720年（日本享保5年）編撰。

4、《心喪集語》，由朱舜水學生安東省菴編撰，其中收錄了朱舜水一生與安東省菴的書信、筆談交流內容。

5、《舜水墨談》，由朱舜水的友人入見竹洞編撰，記錄了朱舜水與人見竹洞的十一次筆談內容。

6、《舜水問答》，由入見竹洞編撰，與《舜水墨談》類似，同樣是朱舜水的筆談記錄，內容較《舜水墨談》更為詳實。

7、《西遊手錄》，由德川光圀的部下小宅處齋編撰，記錄了小宅處齋奉德川光圀之命，前往長崎會面時的筆談內容。

8、《朱氏舜水談綺》，由朱舜水門生安積澹泊編撰，其中收錄了大量朱舜水所繪的圖樣，包括深衣、野服、棺槨、殿閣等等。

上面提到的這8種文獻是當時朱舜水的學生友人所編的《朱舜水文集》，而在後世，不斷地有人修訂、校勘這些文集。主要有：

1、《朱舜水全集》二十八卷，通稱“稻葉本”，由日本學者稻葉君山編撰，於1912年出版。此本完整收錄了“水戶本”和“加賀本”的內容。

2、《舜水遺書》二十五卷，通稱“馬浮本”，由中國儒學家馬浮於1913年以“稻葉本”為底本刪定而成。

3、《朱舜水全集》，由中國臺北世界書局據“馬浮本”排印，於1962年出版。

4、《舜水遺書》，二十九卷，由中國臺北古亭書屋據“馬浮本”排印，出版於1969年。

5、《朱舜水集》，由朱謙之整理，兩冊，由中華書局於1981年出版。由朱謙之依據“稻葉本”校勘，並參照各

版本以增補改訂，是目前應用最為廣泛的版本。

6、《朱舜水全集》，由北京中國書店據“馬浮本”排印，於1991年出版。

7、《新訂出順水集補遺》，由台灣學者徐興慶根據朱謙之所編的《朱舜水集》增補而來，其中收錄了大量《朱舜水集》中未曾收錄的舜水遺文。其所增補的內容大都來自未曾刊行的朱舜水門生、友人的收藏，內容來源主要來自東京大學史料編纂所《耆舊得聞》，日本國立公文書館內閣文庫，日本國立國會圖書館人見文庫，日本九州佐賀鹿島市祐德稻荷神社中川文庫等。

中國學者梁啟超說：“南明有兩位大師，在當時，在本地，一點聲光也沒有，然而在幾百年後，或在外國，發生絕大影響。其人曰王船山，曰朱舜水。”那麼一個在中國一點聲光都沒有的人，為什麼會在日本得到這樣的禮遇呢？

這也是研究朱舜水的另一個因素，因為朱舜水在日本期間，他對中日交流起到了非常大的貢獻。

朱舜水最初居住在長崎，以教書授課為生，其後在1664年，第二代水戶藩主德川光圀派遣儒臣小宅生順來到長崎拜訪朱舜水，並邀請他前往江戶講學，此後德川光圀對朱舜水一直持弟子之禮。朱舜水對當時中國的禮制、儒學、政治、藝術等方面都有相當高的造詣，他在日本有不少弟子日後都成為了有名的學者，比如擔任《大日本史》編修的彰考館總裁安積澹泊，比如被伊藤仁齋長子伊藤東涯稱為關西巨儒的安東省菴，等等。

當時的日本對外國人的看管極為嚴厲，普通的外國人即使想要留在長崎也是很困難的，而朱舜水竟然能夠被召入江戶，其中的緣由主要有以下兩點：

1、朱舜水學問淵博。朱舜水在日本期間，一直採用筆談的交流方式。筆談這一方式的特殊之處在於，需要即時作答，無法查閱參考書，甚至無法仔細揣摩思考，這對筆談者學問的廣博程度，精深程度都有很高的要求，因而筆談者面對需要闡述主觀概念的問題時，常以簡單的回答或是模糊的闡述來帶過，譬如在清朝醫生胡兆新與日本醫官的問答中隨處可見：

問 千賀道榮

明史嘉靖二十年，宮婢楊金英等謀逆，以帛縊帝，氣已絕，大醫院使許紳急調峻劑下之，辰時下藥，未時忽作聲，去紫血數升，遂能言，又數劑而愈。後閱焦竑<sup>1</sup>《獻徵錄》，所用桃人、紅花、大黃諸下血藥也。峻劑果能有起縊死否？

復 胡兆新

縊死之人，虽有急救之法，方書上未見有峻劑醫治者，此或隨機應變之道。

問

舌疳、牙疔、牙癰、走馬牙疳、重舌瘡包之諸症，本



邦之醫士為難治。僕通家有口科，托僕乞先生之高論，倘或有治方，毋吝。

復 胡兆新

此等病自然難治之症，大抵火毒為多，亦無一定之方。問

凡病新瘥後，以食物調治之法有之耶？

復 兆新

病後調攝，不過澹薄寧靜四字<sup>2</sup>。

以上三條問答是胡兆新面對日本醫官的醫學問難時的回答，他的回答以“或隨機應變之道”、“亦無一定之方”、“不過澹泊寧靜”等語帶過，較少表述自身的意見，也罕有自身學識的展現。

胡兆新是彼時日本長崎地區極負盛名的醫生，在他的醫案《胡氏方案》的後記中寫道：胡兆新當時寄居在程赤城的家中，在聖福寺、崇福寺進行診療，前來求診的病患不計其數，治癒的病例舉不勝舉，名聲傳到了江戶。另外，有關他治療方法的報告時常被呈上幕府，大家都認為清國醫師的醫技十分奇特。也正因為如此，江戶幕府的醫官被派遣至長崎向胡兆新求教。

而朱舜水不忌諱“多言”，時常對普通的問題進行闡發，現試舉兩例：

問：今指為本根者如何？

答：君臣、父子、夫婦、昆弟、朋友，天地間之定位也。士、農、工、商，“國之石民也”。男耕而食，女織而衣，民生之常經也。所謂本根者，如斯而已。而又“壯者以暇日修其孝弟忠信”，國何患不治？何患不富？何事於浮文末節哉？以末節而圖治，是猶理絲而棼之也，吾未見其能治者矣<sup>3</sup>！

問題中的“本根”涵義眾多，即可指根本、根基，也可以指本源、初始，即使這樣，此處的“本根”究竟是指何者的根基，何者的本源在問題中也沒有交代清楚，這是一個非常模糊的問題。而朱舜水則是直接將問題的答案指向了治國理民的根基，這是朱舜水“致知力行”，匡扶中原思想的最根本表現。

在與野節的問答中有：

問：鄒漪亦文章之徒乎？

答：大明之黨有二：一為道學諸先生，而文章之士之黠者附之，其實蹈兩船，占望風色，而為進身之地耳。一為科目諸公，本無實學，一旦登第，厭忌羣公，高談性命。一居當路，遂多方排斥道學，而文章之士亦附之。僕平日曰：明朝之失，非韃虜能取之也，諸進士驅之也。進士之能拳天下而傾之者，八股害之也<sup>4</sup>。

野節所問的是鄒漪的為人，而朱舜水的回答則是“大明之黨”，簡單概括了他心中為禍朝野，導致明朝江山分崩離析的罪魁禍首。在此處筆者並不準備探討朱舜水的觀點是否正確，需要明確的是，筆走龍蛇間，朱舜水就能將其心中對朝野得失的原因歸納、剖析清楚，足見這並非妙手偶得，而是源於細緻的觀察與深入的分析。

簡單來說，朱舜水的答不單單是對問題的簡單回應，而是將自己的思想，自己的治學主張融入了自己的回答中，帶有機鮮明的主觀色彩。朱舜水的筆談問答已不僅是學問上的交鋒，互相砥礪，更是其為學，為人的展現。在朱舜水的筆談中，這樣毫無保留地展現朱舜水自身主張與抱負的問答俯拾皆是。

2、朱舜水所學正是當時的日本所需要的。當時的東亞正處在劇變之中，滿清取代大明成為中原的霸主，正是吾其被發而左衽的時代。不僅是中華大地，中華文化也在經歷一場浩劫。而當時免於兵災的日本，作為自隋唐以來中華文化的學習者，很自然地想要繼承中華文化。而繼承中華文化最直接、最快速的方式，也是最能辨別華夷的方式，就是對“禮制”的繼承。而朱舜水，正是日本所需要的一個禮學大家。從朱舜水的角度來說，長留日本意味著他已經放棄了在地理上恢復中原的想法，轉而希望中華文化以另一種形式，在另一片土地上延續下去，因此，朱舜水才具備了同時代的其他人物所不具備的特殊性。

#### [注]

- 1) 底本不清，作“紘”，據《清客筆語》，當作“竝”。
- 2) 《東京大学総合図書館目録》第三頁，v十・一三六・東京大学総合図書館、財団法人日本古醫學資料センター、東京，1978。
- 3) 《答野節問三十一條》，《舜水先生文集》卷十一。
- 4) 《答野節問三十一條》，《舜水先生文集》卷十一。

